
年上のそんな人

柊葉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上のそんな人

【Nコード】

N5671E

【作者名】

柊葉一

【あらすじ】

進展しようと頑張った男のある一夜の話。「その人」が男をどう思っているか、読者にははじめからわかっていたことでしょう。

元気で無邪気、おおらかでさばけていて、しっかりとした芯を持っている、年上のそんな人。

その人と、映画を観て、夕食を食べて、バーに行った。

日付が変わるまで飲んで、帰ることになったが、もう少し一緒に居たくて、飲み足りないと言ってみた。

するとその人は

「家に梅酒とワインならあるけど、どうする？」

とこちらに視線を寄越した。

強がって、飲み足りないと言った心臓が、大きく高鳴った。

その人のアパートまで行くと、その人はもう一度

「どうする？飲む？」と聞いてきた。

こんなチャンスは二度とないかもしれない。そう思いながらも、ここで飲んだ勢いで気持ちを伝えれば、きっと信用してもらえないだろうという懸念もあった。実際、普段より多めに飲んでいたので、足もとがふわふわしていた。

「任せます」

後悔すると分かっているけど、完全に逃げ腰になっていた。

その人は一度考えるように夜空を見上げると、こちらに視線を戻した。

「そのふらふらで帰られるのも、怖いなあ……いいや、とりあえず寄っついていきなよ」

そうして手招きをした。

誘われて、これ幸いと従うことにした。

その人の部屋は、きちんとしているわけでもなく、散らかっている

わけでもなかった。

ワンルームのため、座ったすぐそばにベットがあった。ふわふわしていたので、すぐにベットにもたれてしまった。

「お茶の方がいいでしょ」

とその人が言った。とりあえず、頷いておいた。パソコン、と冷蔵庫の開く音がした。

「こちらは気にせず、先輩は飲まれたらいいですよ」

気を遣ったつもりで言つと、その人は

「冗談、私も結構酔ってるもん」と答えた。

ベットを背にして二人で座っていた。

遅れて回ってきた酒と雰囲気酔って、話すことも辛く感じた。その人も、普段は饒舌なのに何も話さなかった。しばらく沈黙が続いて、急に、本当に上がり込んで良かったのかと、不安に駆られた。しかし、いまさら後に退くこともできないと分かっていた。

「何か、……話して下さい」

無理やりに話題を持ちあげようと、言ってみた。

「ええ、何をよ？」その人がこちらを向く。

「いつもみたいに、ぽんぽん何かでてこないんですか、話題」

「そんな、普段から話題振ってるっけ？……福田内閣についてとか、語ってみる？」

「語れるんですか？」

「や、ゴメン。言ってみただけ」

「ちよつと、もたれさせてもらってもいいですか？」

自然と、言葉が口をついて出た。

しかし、このくらいのことでは、その人は感情をみせてくれない。

「ああ、しんどい？いいよ、寄りかかりなよ」

おいでおいで、とその人が手招きをするので、簡単に寄りかかることができた。

バーで酔って居た時も、その人の肩にもたれさせてもらっていた。その時も思っていたことだったが、なぜだかとても、その人に触れることが心地よかった。緊張なんて吹っ飛ぶくらいにだ。それを素直に、伝えてみることにした。

「なんか、すごいですね先輩って。傍にいとすつごく癒されるんですけど」

もう半分、告白したようなものだった。のに、それでもその人は揺るがなかった。

「え、そう？なんだろう、マイナスイオン出てるのかな」

真顔でそう返してくるので思わず笑った。ついでにその人の腕に、手を絡ませて反応を見ようとしても、その人の表情からは何も読み取れなかった。

途中から、緊張感や不安は、全く感じられなくなった。代わりに、その人の気持ちはどうやってでも知りたくなった。自分にこれだけ優しくしてくれるということは、それだけ、期待してもいいのかと、その思いに対して期待した。

しかし、時間は迫ってくる。朝日が昇る前に家に帰らないと、講義もあるし、その人にも迷惑がかかると思った。

「なんか……」その人がとろんとした目で口を開いた。時間が時間だったので、かなり眠たそうな顔をしていた。

「なんですか？」顔を覗き込んで聞いた。

「どうでもよくなってきたなあ……」

「え？」

その人は急に立ち上がると、そのままベットに倒れこんだ。

困惑しながら、その人の半分枕に埋もれた顔を見ると、その人はこちらを見て、にこおっと笑った。

その表情に突き動かされて、こちらもベットに腰をかける。

そしておそろおそろ、その人の隣に、体を横たわらせた。その人はただ、こちらを見ていた。

「ああ、やつと腰が……」体を伸ばしながら言った。横を見るのは恥ずかしかった。

「ふふ、君はさあ、結構寂しがり屋だったりするでしょ？」

唐突な質問だった。けれど、素直に答えることにした。

「ああ、そうですね実は。あんまり人に言えないですけど」

「甘えるのも下手そうだね」

「うん、そうです、たぶん」答えながら、横目で少しだけその人の顔を見た。

上目遣いでじつと見られていた。それが分かって、恥ずかしくなった。今、その人を直視すれば、理性が吹き飛ぶと思った。

「今日は楽しかったから……そんな寂しがり君にオブションサービスをあげよう」

そう言つて、不意にその人は上体を起こすと、こちらの腕をまっすぐに伸ばさせて、そして、その腕の上にまた寝ころび、体の前に腕を縮めて、こちらの胸元に顔を寄せて来た。

平常心なんか消える。心臓の鼓動が、一気に跳ねあがった。

こちらの動揺とは反対に、その人はそのままの状態で落ち着き払っていた。

沈黙のなか時折、体の位置を正すようにしながらも、こちらに身を寄せてくる。

その人を今まで以上に愛しく思った。

高鳴る鼓動を感じながら、その人へ要求する。

「もっと、……近づいていいですか？」

その人は、ふふ、と笑ったかと思うと、「いいですよ」と答えた。空いている方の腕で、その人の体をおそろおそろ抱き寄せる。柔らかい感触に、目がくらみそうだった。

顔も口も、呼吸も、心臓の鼓動も、すべてが近すぎた。

キスしようと思えば、いつでもできる距離。

もう、考えることも馬鹿らしくなって、その人に思わず聞いた。

「……こういうことを許してくれるってことは、……そういう風に思ってくれてるって取ってもいいんですか？」

一番、鼓動が高鳴っているかと分かっていた。

その人は、腕の中で肩を竦めると、ゆっくりとこちらの背中に腕を回してきた。

「それを私に確かめるってことは、君はそういうことか？」

顔を見せずに、俯いたままその人が聞き返してきた。

「そうです」はつきりと答える。

するとその人は少しだけ体を離し、こちらにちゃんと向き直るようにして、まっすぐに視線を合わせてきた。

「……私は、手がかかるよ。いいの？」

試すような視線が注がれていた。その視線に抗うことは不可能だった。

「いいです、全然」考える必要などなかった。

「じゃあ、そういうことだよ」

そういつてその人は、回してきた腕に力を込めた。それに応えて、こちらもその人を力いっぱい抱きしめた。

その瞬間、今まで感じたことのない幸福感に包まれる。

その時。

「あーああ……ようやく言ってくれた」クスクスと笑いながら、その人が言った。

「……え？」

「早く言えばいいのに、なかなか言わないから、こんなことまでしちゃった。まあ、結果的に落とせたからいいけど」

いたずらっぽい目がこちらを向いていた。

「わざと、仕向けたんですか？」

あぐりと空いた口が閉じられそうになかった。

「うん、そう。」にこおと、悪びれる様子もなく、素敵に笑う。

呆れながら、悔しくも思いながら、この人には絶対敵わない、改めてそう思わされた。

年上の、僕のそんな人。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5671e/>

年上のそんな人

2010年11月20日15時19分発行